

原 著

ダウン症候群者およびその家族の定期歯科受診行動に
影響する要因に関する質的研究久篠奈苗^{1,2)}

要旨：ダウン症候群者およびその家族におけるこれまでの歯科受診経験をもとに、受診時の経験や心境と歯科定期受診行動との関連について、半構造化面接と修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的研究による検討を行った。

定期歯科受診行動の決定までのプロセスは、受診前、初回受診、受診行動決定因子、受診行動決定の時間軸で構成され、初回受診後、初回受診および数回の受診の経験から定期歯科受診促進因子、あるいは、定期歯科受診抑制因子を生じ、その後それぞれの因子により、定期歯科受診継続と定期歯科受診しない・中断、あるいは、歯科医院の変更により受診行動決定が行われていた。また、定期歯科受診していても、通院の時間的制約や通院の距離的制約を生じ、定期歯科受診中断や歯科医院の変更が必要となることもあった。定期歯科受診しない・中断の対象家族には、定期歯科受診への躊躇の思いがあった。歯科医院の変更が必要となり新たに歯科を受診する際には、受診前の状況に戻り、再度そこから受診行動決定まで、同様のプロセスをたどっていた。

定期歯科受診継続には、歯科医院側の理解ある対応が必要であることが再確認され、本人および母親のポジティブな経験も定期歯科受診促進因子であることが示唆された。

Key words : Down syndrome, Dental visit, Qualitative research

緒 言

歯科における障害者への対応は「歯科口腔保健の推進に関する法律」において言及されており、自治体の条例や歯科口腔保健計画においても対策を講じているところが多い^{1,2)}。また、障害者およびその家族の一般歯科開業医受診希望は多く、一般歯科開業医における障害者への対応のニーズが高まっている³⁾。

著者はこれまでに歯科医院へのアンケート調査および障害者福祉施設利用者へのアンケートを行い、障害者が受診しやすい歯科受診環境の検討を行った^{3,4)}。その結果、障害者の家族は、歯科受診に際して歯科医師やスタッフの対応、また、治療内容などに不安を抱えていたが、歯科医師やスタッフの理解ある対応によりそれらの不安を軽減できる可能性があること、また、障害者の家族における受診時の困ったことに関連する因子の一つとして、定期検診を受けていないことが挙げられた。そして、障害や対象を絞った問題点の把握と受診行動との関連のより詳細な検討が必要と考えられた。

ダウン症候群（以下、DS）は、歯の異常（先天欠如、形成不全、形態異常、乳歯の晩期残存、萌出遅延）、咬合・歯列異常、歯周疾患、軟組織の異常（巨舌、溝状舌）などの口腔所見を伴う^{5~7)}ため、早期より歯科受診経験をすることが多いと考えられる。また、DSにおいて歯周疾患の治療および予防は重要であり、定期的な歯科受診も推奨されている⁶⁾。一方で、DSは先天性心疾患や精神運動発達遅滞などを伴うことが多く^{5~7)}、歯科治療の際には特別な配慮も必要となり、歯科医院の選択や歯科受診時の困難が予想される。

定期歯科受診行動の要因については、アンケート結果の統計分析による量的研究が多く^{8~13)}、それらの要因がどのように実際の受診行動と関連しているかについての質的研究はほとんど行われていない。これまでの歯科受診や口腔衛生に関する調査研究に関して、質的研究による報告は少なく^{14~16)}、さらに、障害をもつ人における質的研究も少ない^{17~19)}。

本研究は、DS者およびその家族におけるこれまでの歯科受診経験をもとに、心理面や受診時の経験と歯科定期受診行動との関連について、質的研究による検討を行うことを目的とした。

¹⁾ 久留米大学大学院医学研究科社会医学系環境医学

²⁾ 久留米大学医学部歯科口腔医療センター

(原稿受付日：平成 27 年 6 月 12 日)

(原稿受理日：平成 27 年 8 月 24 日)

対象および方法

1. 対象

某県内の某 DS 当事者団体（以下、A 団体）代表者に本研究の趣旨を説明し、調査への協力を依頼した。A 団体に所属する 20 歳代から 30 歳代の DS 者およびその家族を調査対象とし、歯科に定期的に受診している者としていない者が含まれるよう調査協力者の選出も依頼した。同じ当事者団体に所属の者で対象者の世代を限定したことにより、居住地域が限定され、受けることができる歯科医療に大きな差が生じないこと、対象者およびその家族が同じ情報を共有しうること、学校健診などがないためみずからの意思で歯科受診が必要であるという、共通の状況になるように配慮した。また、歯科に定期的に受診している者としていない者が含まれることで、定期受診していない要因からの定期受診につながる要因の検討や、定期受診している者においても過去のネガティブな経験がどのように変化したかなどの検討ができることを考えた。なお、本研究では定期歯科受診については、歯科健診あるいは口腔ケアを目的に、半年に 1 回以上の一定の期間ごとに歯科受診していることを要件とした。

A 団体事務長より対象者およびその家族に本研究の趣旨説明を行い、同意の得られた 6 家族を被験者とした。

2. 面接方法、内容

面接は、対象となる DS 者およびその家族（以下、対象家族）と、研究代表者である著者との 2 対 1 で実施した。2015 年 4 月、A 団体がよく利用している公共施設の 1 室にて 1 家族ごとに面接を実施した。質問の内容および対象家族の疲労を考慮して面接時間は 1 家族あたり 20 分から 30 分程度とし、半構造化面接にて情報収集を行った。半構造化面接は、おおまかな質問、すなわち、インタビューガイドを用意し、回答者に経験したことなどを自由に語ってもらい、そのなかで必要に応じて挿入質問を入れて語られなかった見方についても振り返ってもらうことにより、詳細で豊富なデータを収集することができる²⁰⁾ようにした。面接中の会話は事前に対象家族に同意を得たうえで IC レコーダーにて記録し、逐語録を作成した。

面接内容は、初診時の年齢および受診理由、初めて歯科受診したときから現在にいたるまでの歯科受診状況、歯科受診の頻度、歯科受診時の治療および経験内容、受診に際して感じること（不安、困ったこと、よかったこと）、対象者の歯科受診への適応状況、歯科医院を変えた場合の経緯、歯科定期受診をしていない・中断の場合

の理由、現在受診している歯科医院を選択した理由、その他家族の歯科や医療に対する意見などについて、自由な発言を促した。

3. データ分析

今回の面接では、すべての家族において、回答の大部分は母親から語られ、その内容はいずれもインタビューガイドに沿ったものであったため、母親の語りを分析対象とした。面接から得た逐語録から、母親が語った部分（以下、データ）を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）^{20, 21)}を用いて分析した。M-GTA は、社会的相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れ、ヒューマンサービス領域において、プロセス性をもつ現象の分析に適している。また、限定された範囲内における一般化可能な知識を求める立場にある。手順は、以下の方法で行った。まず、分析ワークシートを用いてデータから説明概念を生成する作業を行った。1 人目のデータより、歯科受診に関連する行動や経験や心境について述べられている箇所に着目して取り上げる範囲を判断し、抜き出した当該部分を「具体例」とし、その「具体例」の内容を簡潔な文章として表現したものである「定義」を生成した。その後、定義をさらに凝縮した言葉で表現した「概念」を生成した。分析ワークシートは、1 つの概念ごとに 1 つずつ作成し、2 人目以降のデータ分析も既存の概念に該当する具体例はその分析ワークシートに追記していき、既存の概念に該当しない具体例があれば新たに分析ワークシートを作成し、新たに定義および概念を生成した。そして、抽出された概念間の関連を検討し、類似の概念からサブカテゴリー、さらに、カテゴリーを生成し、カテゴリーおよび概念の関係をまとめ、結果図を作成した。

4. 倫理的配慮

本調査は久留米大学倫理委員会の承認（承認番号 12152）を得て行った。調査対象家族には、本研究の目的、方法、情報の取り扱いなどについて文書および口頭にて説明し、同意を得たうえで調査を実施した。

結 果

1. 対象者の基本属性（表 1）

対象となった DS 者 6 名は、男性 1 名、女性 5 名で、全員 20 歳代であった。同席した家族回答者は全員母親であった。

歯科初診時の年齢は 1~6 歳頃、これまでに受診した歯科医院数は 1~4 件、現在受診中あるいは最後に受診した歯科医院は一般歯科開業医 4 名、療育施設内の歯科

表1 対象者の基本属性

	事例	A	B	C	D	E	F
対象者	性別	女性	女性	女性	女性	男性	女性
	年齢	20代後半	20代前半	20代前半	20代後半	20代後半	20代後半
	初診時の年齢	4歳か5歳	2歳	3歳	6歳ごろ	1歳	3歳
	これまでに受診した歯科 医院の件数	2件	3件	1件	2件	4件	1件
	受診する歯科医院選択者	母親	両親	母親	母親	母親	母親
	歯科受診時の付添	送迎のみ	送迎のみ	送迎のみ	常時必要	不要	常時必要
	歯科受診時の交通手段	公共交通機 関, 徒歩	自家用車	自家用車	自家用車	徒歩のみ	公共交通機関
	現在受診中あるいは最後 に受診した歯科医院	開業医 (一般歯科)	開業医 (一般歯科)	療育施設内の 歯科	大学病院	開業医 (一般歯科)	開業医 (小児歯科)
	(歯科医師数, 担当状況)	Dr. 1名, 担当制	Dr. 1名, 担当制	非常勤 Dr. 1名, 担当制	Dr. 複数名, 担当制	Dr. 複数名, 担当状況不明	Dr. 複数名, 担当制
	現在の定期歯科 受診状況	なし (症状時受診)	6カ月に 1回	高校1年まで 3~4カ月に1 回, その後中断	4カ月に 1回	3カ月に 1回	4カ月に 1回
回答者	続柄	母	母	母	母	母	母
	年齢	50代	50代	50代	60代	60代	60代
	歯科受診状況	症状時のみ	定期受診, 約30年	症状時のみ	症状時のみ	定期受診, 10年以上	症状時のみ
	現在受診中あるいは最後 に受診した歯科医院	子と別の開業 医(一般歯科)	子と同じ開業 医(一般歯科)	子と別の開業 医(一般歯科)	子と別の開業 医(一般歯科)	子と同じ開業 医(一般歯科)	子と別の開業 医(一般歯科)

1名, 大学病院1名であった。現在の歯科受診状況は、定期受診継続者4名, 定期受診中断者1名, 非定期受診者1名であった。

2. 分析対象

ICレコーダーに録音した音声より、逐語録作成に使用した部分の面接時間は、平均21.3分であった。また、逐語録より分析対象とした母親の語り部分のみの文字数は、平均3,676字であった。

3. 定期歯科受診に関連する要因

時間軸に沿って、カテゴリとそれを構成する概念の関連をまとめた結果図を図1に示す。結果図では、概念名を<>内、サブカテゴリ名を{ }内、カテゴリ名を[]内に示し、関係性の流れである時間軸名は【 】内に示した。時間軸に沿ってカテゴリ、サブカテゴリおよび概念を用いて分析結果を説明する。

1) 【受診前】

【受診前の心境】としては、<初回受診前の不安な

し>の家族と、子どもの新たな環境への適応への不安や歯科医院の障害者の受け入れへの不安をもつ初回受診前の不安あり>の家族に分かれた。

2) 【初回受診】

【初回受診】では、医療従事者や障害者関係施設などからの情報で乳歯萌出後の受診の必要性を知り<初回受診は検診>目的であった家族と、永久歯萌出時の乳歯残存により受診が必要と判断して<初回受診は治療>目的であった家族がいた。

3) 【受診行動決定因子】および【受診行動決定】

初回受診あるいは数回の受診による心境や経験から【受診行動決定因子】が形成され、それらの経験が【受診行動決定】に影響を与えていた。

【定期歯科受診促進因子】について、概念、定義、具体例の一部を表2に示す。本人が<早期より歯科に適応>したことや家族の<継続的な受診のメリットを実感>といった{ポジティブな経験}、そして、<本人の適応方法の模索>、本人あるいは家族への<歯科医師の説明、指示>、本人および家族と<歯科医師との信頼関

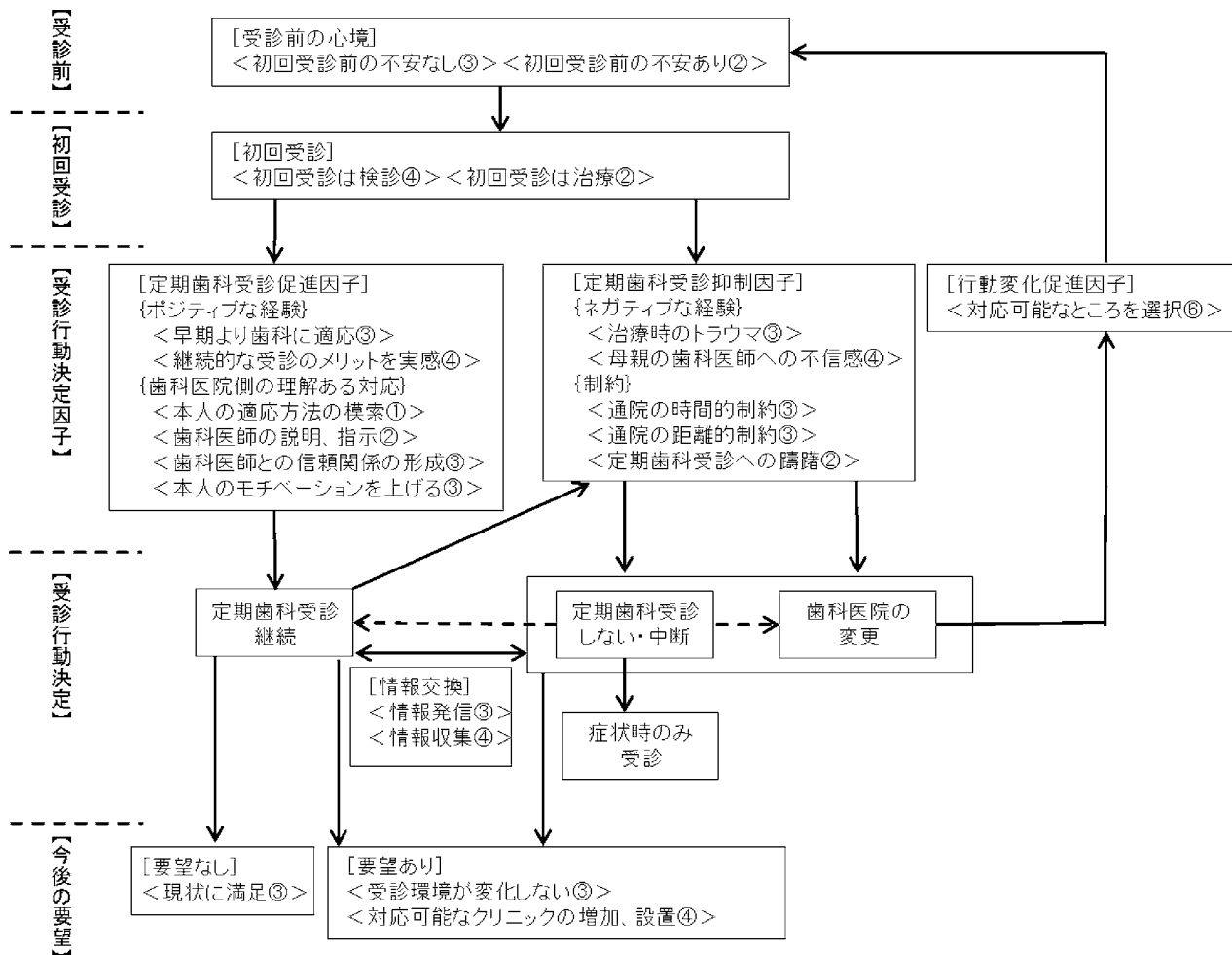


図1 DS者・家族の定期歯科受診に関連する要因の時間軸との関係

注1) <概念>内の数値①～⑥は、その概念を形成する具体的口述例を述べた対象家族数を示す。
 注2) 実線の矢印は、変化・影響の方向を示す。点線の矢印は、今後変化する可能性の方向を示す。

係の形成>、<本人のモチベーションを上げる>といった【歯科医院側の理解ある対応】が定期歯科受診継続に関連していた。

一方、【定期歯科受診抑制因子】について、概念、定義、具体例の一部を表3に示す。受診時の<治療時のトラウマ>や<母親の歯科医師への不信感>といった【ネガティブな経験】により、定期歯科受診しない、あるいは、歯科医院の変更となっていた。定期歯科受診しない・中断の対象家族には、<定期歯科受診への躊躇>の思いがあった。また、定期歯科受診していたが、進学や就職、転居により<通院の時間的制約>や<通院の距離的制約>を生じ、定期歯科受診中断、あるいは、歯科医院の変更が必要となった対象家族もあった。

定期歯科受診継続の家族と、定期歯科受診しない・中断および歯科医院の変更の家族間、あるいは、定期歯科受診継続の家族間内において、歯科に限らず医療関連の【情報交換】が行われていた。

さらに、歯科医院の変更が必要となった対象家族は、障害者対応とわかっている歯科医師や家族が受診していて受け入れを承諾した歯科を受診するなど<対応可能なところを選択>する傾向にあった。そして、新たに歯科を受診する際には【受診前】に戻り、再度そこから【受診行動決定】まで、同様のプロセスをたどっていた。

4) 【今後の要望】

定期歯科受診継続の家族の一部からは<現状に満足>との意見があった。一方、定期歯科受診継続の家族、および、定期歯科受診しない・中断の家族の双方において、同じ医師や歯科医師に継続的に受診できることや今後も現状の継続を望む<受診環境が変化しない>こと、また、障害をもつ人への対応可能な歯科医師の増加や夜間・緊急時に近所で対応できるように<対応可能なクリニックの増加、設置>を望んでいた。

表2 定期歯科受診促進因子

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	定義	具体例
定期歯科受診促進因子	ポジティブな経験	早期より歯科に適応	初回から歯科受診では問題なかった。	<ul style="list-style-type: none"> ・案外、最初から泣かなかつたから、定期的に（行けています）。〔事例B〕 ・何の問題もありませんでした。先生は口を開ける器具を使ってましたけど、なくてもいい感じでしたね。〔事例C〕 ・行ってみたらむし歯があつたんですよ。…そこまで嫌がらずに済んで初期の段階で終わったから、行ってよかつたなって。〔事例F〕
		継続的な受診のメリットを実感	定期受診をしてよかつたことがある。	<ul style="list-style-type: none"> ・歯の状態は親はよくわからないしそういったことは安心ですかね。歯並びとかの不安とかも教えてくれているいろいろ聞かせて頂けますので。〔事例C〕 ・生え変わりの時期に早めに抜いてくださったりとか、…ちゃんとチェックして頂いたから、そういうことは心配なく生え変わりの時期を過ごせたのと、やっぱり、むし歯になっていないかどうかっていうのを定期的に診てもらっているから安心です。〔事例F〕 ・磨き方の指導もその都度して下さって…。最後のチェックもしなくてよくなって、今は完全に一人で（磨いています）。〔事例F〕
	歯科医院側の理解ある対応	本人の適応方法の模索	慣れればできる。	<ul style="list-style-type: none"> ・（最初の歯科では、）この子が初めての場所、病院とかいろいろな機械があるからそれでまず絶対ビビるっていうことで、…水をシュシュって出すのでピーっと口の中に出して遊んだり、それを30分くらい遊んで、じゃあまた来てね、っていう感じで、それを3回くらいやったかな。〔事例D〕 ・（次の病院では、）おおらかなゆったりされた先生で、…割と無理強いされなかったもんですから、それからどンドンいろいろなのに慣れていって。〔事例D〕
		歯科医師の説明、指示	医師の指示に従って受診する。医師の説明が必要である。	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的知識がないぶん、これから先、こういうふうにしていけばいいですよ、っていうのがわかれば。〔事例A〕 ・…いろいろ病院には行ったけど、…定期的に来なさい、って言われたときに必ず行くことですよ。〔事例B〕
		歯科医師との信頼関係の形成	いい歯科医師と出会った。	<ul style="list-style-type: none"> ・…すごくいい先生だったので。…先生を追って受診していました。〔事例B〕 ・しょっちゅう（全身）麻酔できないよね、ってことで、僕の治療は30分くらいで終わるから、じゃあ僕が〇〇病院に行きますって言われて、耳の手術の前にやってくさって。〔事例D〕 ・歯医者さんだけです、一人で行けるのは、歯医者さんのおかげだと思います。〔事例E〕
		本人のモチベーションを上げる	本人の能力を引き出している。楽しく受診している。	<ul style="list-style-type: none"> ・衛生士さんが歯磨きのシールを作って…3カ月間ちゃんと磨くと歯ブラシをもらえるんです。だからそれを楽しみにしています。〔事例B〕 ・今は一人で行けます。…お手紙に今日はこういうことをしましたとか、あと一言添えてあつたりするので安心してやっています。〔事例E〕 ・歯医者さんに行くのは先生が優しいのと…お話するのが楽しみで。〔事例F〕 ・わかっててもわかってなくても、本人に言ってくださると、それにプラス親から言ってあげれば、そっか、って納得する部分もあるし。〔事例F〕

具体例中の（ ）は、語られた内容の流れから、回答者の語りになかつた部分を補足している。

表3 定期歯科受診抑制因子

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	定義	具体例
定期歯科受診抑制因子	ネガティブな経験	治療時のトラウマ	治療時にトラウマがあった。治療が困難になった。子どもの様子を見て、また連れて行きたいと思わなかった。	<ul style="list-style-type: none"> 初めて歯医者に行って、泣いて前歯の抜歯をしてもらって、…ほかの歯は何ともなかったの、それから歯医者に対しては私もなかなか、1回目のことがあったので、何かなければ連れて行きたくないようになったこともあります。〔事例A〕 1回目よきのことを覚えているから、麻酔の注射器もそばに来たらイヤって、それで〇〇大の小児歯科に紹介して頂いたんです。〔事例D〕 治療を一度受けたんですけど、その時にネットにグルグル巻きにされて、…そこですごい怖かったのか泣きすぎて、…それもあってあまり怖がらない所に連れて行きたいと思って、…替えました。〔事例E〕
		母親の歯科医師への不信感	母親自身が歯科医師への不信感、抵抗、不満がある/あった。	<ul style="list-style-type: none"> 一緒に歯医者さんに行っていたんですけど、私がその歯医者さんでちょっとエツと思うことがあったので私が先に歯医者さんを替えたんですよね、それからこういう息子がいるんですけど診てもらえますかって言ってこの子も一緒に診てもらおうようになりました。〔事例E〕 例えば小っちゃい頃から検診で歯医者に慣れていて、何回かあって、ちょこちょこ治療をして、抜歯ならともかく、行って最初に抜歯があったので。〔事例A〕 うちはいいところに恵まれたんで満足しているんですけど、近所の病院に行って治療がうまくいかなかったりとか、こういう子は診れないよねって対応されたりするところもあったりっていうのを聞いたりするので、…信頼して受診できる場所を探さないといけない。〔事例F〕
	制約	通院の時間的制約	時間的に通院が難しくなった。予約が取りづらかった。遅くまで診療する対応可能な歯科を見つけるのが困難だった。	<ul style="list-style-type: none"> 交通ですね、1時間かかるから、学校も1日休んで行ってきました。〔事例B〕 この前ちょっと一度行ってみたんですけど、今度は（本人が）お仕事を休まないといけなくなるから、やっぱりここでは続けられないなと思って、…ふだんの歯医者さんはいっぱい夜もあいているじゃないですか。そういうところにも、この子たち対応にどうぞって手が挙がっている病院が各地域にあると連れて行けるから。〔事例C〕 行った歯医者さんは有名な歯医者さんで受診者も多くて予約がなかなか取れずにむし歯がなんかどんどん増えていくような気がして、あとは近くの…小児歯科に替えました。〔事例E〕
		通院の距離的制約	転居をきっかけに歯科医院を替えた。周囲が勧める歯科医院が近所がない。	<ul style="list-style-type: none"> ちょっと距離がまあ、どっちも遠くはなかったんですけど、引っ越しして向こうに行くのはちょっとねーっていう感じで。〔事例A〕 私らの周りは〇〇歯科一辺倒なので、…それ以外のところに行っている話はうちの地域であんまり聞かなくて、…個人の歯医者さんでどこかいいところがあればいいなと思ってるんですけど、今、特にここってところに当たらない感じですね。〔事例C〕
		定期歯科受診への躊躇	定期歯科受診はしていないが必要性は感じている。	<ul style="list-style-type: none"> 学校を卒業してから定期検診っていうのは学校健診がないぶん、気をつけないといけないかなと思うけど、なかなかっていうのが実情です。〔事例A〕 ずっと気にはしてるんですけど、もう行かなきゃいけないと思って、この話（面接調査）を聞いてドキッと、定期検診してない人って聞かれて、はーい、って。〔事例C〕

具体例中の（ ）は、語られた内容の流れから、回答者の語りになかった部分を補足している。

考 察

1. M-GTAによるデータ分析の利点

今回、データ分析には、M-GTAを用いた。この手法による分析結果は、社会的相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れ、限定された範囲内における一般化可能な知識を求める立場にある。本研究は、ある団体所属のDS者の一部であり限定された対象者であったが、面接において各対象家族の豊富な経験が語られ、そのなかでの歯科定期受診行動のプロセスを概観することができた。

アンケート調査では、調査者が予測される回答を選択肢としたものなどで対象者に回答を求めるものが多く、これまでに、多くの研究で定期歯科受診に関連する要因の検討が行われ^{8~13)}、一般成人における定期歯科受診の要因として、歯科医院側の姿勢が重要であることが明らかになっている^{8,11~13)}。本調査にて面接で語られた対象家族の歯科での豊富な経験の内容は、具体的かつ詳細なものであった。特に、[定期歯科受診促進因子]の[歯科医院側の理解ある対応]の概念や具体例は、著者の先行研究³⁾にて言及した、「障害者が受診しやすい歯科医院」を目指すために求められる「歯科医師やスタッフの障害者への理解ある対応」について、その具体的な対応を知る手がかりにもなると考える。また、著者の調査³⁾において、歯科医師の対応、スタッフの対応は障害者の家族の歯科受診時の不安を軽減できる可能性が示唆されたが、対象をDSに絞った本調査においても[定期歯科受診促進因子]として歯科医師や歯科衛生士の対応に関連したものが多く含まれ、サブカテゴリーとして[歯科医院側の理解ある対応]が抽出され、歯科医院側の対応の重要性が再確認された。さらに、本調査より本人が<早期より歯科に適応>したことや家族の<継続的な受診のメリットを実感>といった[ポジティブな経験]も[定期歯科受診促進因子]であることが示唆された。これまでの他の研究においても定期歯科受診と小児期の歯科への適応について十分に検討されていない。本調査対象家族だけでなく他のDS者およびその他の障害者にも共通するのか、あるいは、一般成人にも同様の傾向があるのか、さらなる検討も必要と考えられた。

2. DSにおける定期歯科受診の重要性、定期歯科受診に関連する要因

DSでは、特に歯周疾患の頻度が高く、早期より重症化が進行する傾向にあり、その予防および治療において、定期的な歯科受診が推奨される^{6,7)}。また、DSの老化および退行による歯科受診への影響が指摘され、口

腔内環境の維持向上のため、継続的な歯科受診の必要性についても報告されている^{22,23)}。そのため、DSの歯周疾患の予防や治療、長期的な口腔管理を行っていくためには、受診行動の要因の検討も重要である。

本調査にて、<初回受診は検診>目的のものでは、対象家族が当初より歯科への関心が高く、本人の<早期より歯科に適応>をはじめとする促進因子がより積極的な歯科受診を可能とし、定期歯科受診につながったと考えられた。

本研究から、抽出された[定期歯科受診促進因子]のうち、歯科医師やスタッフの<本人の適応方法の模索>、<本人のモチベーションを上げる>といった[歯科医院側の理解ある対応]は、DS者本人と歯科医師およびスタッフとの良好な関係の構築につながり、歯科受診への適応の促進になると考えられる。DS者は明るく人懐っこい性格をもっており⁷⁾、その性格も適応および良好な関係の構築において要因となることが考えられた。

一方、同じ医師や歯科医師に継続的に受診できることや今後も現状の継続を望む<受診環境が変化しない>ことが望まれていた。DS者においては、加齢に伴うこだわりの増強とそれによる歯科受診困難の報告もある²³⁾。今後もDS者が安心して歯科受診を継続するためには、担当する歯科医師が変わらず、慣れた歯科医院に受診できることも重要と考えられた。

また、定期歯科受診しない・中断の対象家族において、<定期歯科受診への躊躇>の思いがあり、定期歯科受診の必要性を理解するも受診するにいたっていないことが明らかとなった。躊躇からの行動変容のためには、歯科受診時に[定期歯科受診促進因子]を実感することや、歯科関係者や公的機関などから定期歯科受診の重要性についての啓蒙活動が必要と考えられる。また、所属する団体にて当事者間での情報交換も行われており、定期歯科受診継続の家族からの情報もよい影響を与える可能性がある。

3. 本研究の限界

本調査では、面接において母親からの回答が大部分でありそれをもとに分析を行ったため、DS者の家族、特に母親の心境や経験を反映した結果であったと考えられた。

本研究から得られた理論は、ある団体所属のDS者の一部であり限定された対象者であったため、ただちに一般化は困難であるが、他のDS者、さらにはDS以外の障害をもつ人々の受診行動の予測、歯科以外の他の医療機関受診にも応用できる可能性があり、今後それらの可能性の検証も行っていく必要がある。

また、歯科医師の年齢や経験によっても DS 者だけでなく患者への対応が異なり、受診行動への影響が予想されることから、歯科医師側の要因による患者の定期受診行動との関連についても今後、検討の必要があると思われる。

結 論

今回、対象とした DS 者における定期歯科受診行動の決定までのプロセスは、受診前、初回受診、受診行動決定因子、受診行動決定の時間軸で構成され、初回受診後、初回受診および数回の受診の経験から定期歯科受診促進因子、あるいは、定期歯科受診抑制因子を生じ、その後それぞれ定期歯科受診継続と、定期歯科受診しない・中断、あるいは、歯科医院の変更に受診行動決定が行われていた。また、定期歯科受診していても、定期歯科受診中断や歯科医院の変更が必要となることもあった。定期歯科受診しない・中断の対象家族には、定期歯科受診への躊躇の思いがあった。歯科医院の変更が必要となり、新たに歯科を受診する際には受診前の状況に戻り、再度そこから受診行動決定まで、同様のプロセスをたどっていた。

謝 辞

調査にご協力いただきました団体関係者各位および対象者とそのご家族の方、久留米大学医学部歯科口腔医療センターおよび環境医学講座の関係者各位に心より感謝いたします。

文 献

- 小椋正之：「歯科口腔保健の推進に関する法律」に基づく基本的事項の特色と今後の歯科口腔保健施策について。保健医療科学，63：98-106，2014。
- 深井穂博，大内章嗣：歯科保健推進条例の広がりとは今後の展望。保健医療科学，60：366-372，2011。
- 久篠奈苗：A 市とその周辺地域における障害者の受診状況調査—家族回答の検討—。障歯誌，35：623-632，2014。
- 久篠奈苗：A 市の歯科診療所における障害者の歯科受診状況調査。障歯誌，34：616-625，2013。
- 池田正一：Down 症候群。池田正一，黒木良和，編著，口から診える症候群・病気。第 1 版，138-139，日本障害者歯科学会，東京，2012。
- 白川哲夫：知っておきたい「小児歯科」7。先天性疾患と歯・口腔の異常。小児科臨床，63：2275-2280，2010。
- 松崎 哲，松崎文子，他：障害をもつ患者さんが来院したら 1 ダウン症。歯界展望，119：720-721，2012。
- 笹原妃佐子，河村 誠，他：定期歯科健診への受診行動に影響する要因について。口腔衛生会誌，54：196-207，2004。
- 佐藤公子：学童の定期歯科健診をささえる要因の検討—保護者の歯科保健に対する意識と学童の定期歯科健診の関連—。小児歯誌，47：752-759，2009。
- 杉浦 剛，岸 光男，他：データマイニングの手法を用いた定期歯科受診者の受診中断に関わる要因の分析。口腔衛生会誌，61：225-232，2011。
- 石田智洋，安藤雄一，他：Web による定期歯科受診の要因—受診者と歯科医院の特性—。口腔衛生会誌，62：365-375，2012。
- 安藤雄一，深井穂博，他：定期歯科受診像を探る—Web 調査から見えてくる実態と要因—。歯界展望，120：780-784，2012。
- 松尾 文：歯科診療所における患者の歯科医療従事者に対する信頼感と定期歯科受診行動との関連。日歯学誌，9：32-40，2014。
- 加藤智崇，杉山精一，他：長期メンテナンス受診患者における患者背景の質的分析。日歯保存誌，57：268-275，2014。
- 山本武志，橋本廸生：患者が歯科の「医療事故」を認知するプロセスに関する質的研究。日本医療・病院管理学会誌，49：5-14，2012。
- 岡崎早弥佳，小平裕恵，他：子どもが歯科治療体験を意味づけるプロセス—幼児期の子どもと歯科医師，親の三者の理解のずれという観点から—。上智大学心理学年報，35：39-50，2011。
- 山内昭子，田中慶子，他：自閉症児の歯科受診にともなう母親の思い，家族看護学研究，15：22-29，2009。
- 村井裕子：歯科を利用する身体障害のある子どもの口腔ケアにおける母親の工夫。日本小児看護学雑誌，21：17-23，2012。
- Klingberg, G. and Hallberg, U. : Oral health—not a priority issue A Grounded Theory analysis of barriers for young patients with disabilities to receive oral health care on the same premise as others. Euro. J. Oral Sci., 120 : 232-238, 2012.
- 木下康仁：ライブ講義 M-GTA. 35-229, 弘文堂, 東京, 2007.
- 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 89-229, 弘文堂, 東京, 2003.
- 高野知子，小松知子，他：ダウン症候群の老化および退行と歯科受診における変化（第一報）。老年歯学，28：27-33，2013。
- 植田郁子，高野知子，他：施設入所の 40 歳以上のダウン症候群の口腔内状況に関する調査。障歯誌，35：633-639，2014。

Qualitative Research on Periodic Dental Visits among Patients with Down Syndrome and Their Families

KUSHINO Nanae^{1,2)}

¹⁾Department of Environmental Medicine, Kurume University Graduate School of Medicine

²⁾Dental and Oral Medical Center, Kurume University School of Medicine

This study was conducted to investigate the relationship between periodic dental visits and the relevant factors for Down syndrome patients and their families according to their experiences during previous visits. Data were collected using semi-structured interviews with patients and their families, and were analyzed by qualitative research methods.

The process of deciding whether or not to visit the dentist periodically involved the following stages : pre-consultation, initial consultation, determinants for periodic dental care, and decision on whether to visit. Experiences from the initial visit and subsequent visits resulted in factors that either promoted or suppressed the need for periodic dental visits. Each factor was related to a decision on whether to : continue periodic dental visits, cease or suspend periodic dental visits, or switch to another clinic for dental care. Time or distance also caused cessation/suspension of periodic dental visits or switching to another dental clinic though they continued periodic dental visits. Some families were hesitant and ceased or suspended their periodic dental visits. When families were required to switch to another dental clinic, they followed the same aforementioned selection process (i.e., pre-consultation, initial consultation, determinants for periodic dental care, and decision on whether to visit).

This study reaffirmed the need for patients to continue periodic dental visits by receiving supportive correspondence from dental clinics and suggested that positive experiences of patients and their families were factors that promoted periodic dental visits.